

## 〈2〉イスラエルから見た中東 —周辺戦略の変容に着目して

防衛大学校 准教授 江崎 智絵

### はじめに

イスラエルが抱く自己イメージのひとつに孤立があると指摘されている<sup>1</sup>。ユダヤ人に降りかかったホロコーストを頂点とする受難や唯一のユダヤ人国家という要素に規定されたものである。ゆえに、イスラエルにとっても当然ながら、中東地域内外の主体と友好関係を築き、安全を確保することは不可欠であった。その対象となったのは、国家からエスニック集団に至るまで多様であった。本稿が着目するのは、イスラエルと域内の主体との関係である。これは、以下のような現状認識に基づくものである。

2023年10月7日に発生した「イスラーム抵抗運動（略称ハマース）」によるイスラエルへの襲撃事件（以下、10.7事件）により不安定化した中東では、地域秩序の「回復」が模索されている。ただし、10.7事件の発生は、それ以前の状態について安定していたとみることを躊躇させる。というのは、10.7事件の発生こそ、それ以前の地域秩序に脆弱性が内容されていた証であると考えざるを得ないからである。

イスラエル軍のインテリジェンスは、10.7事件が

発生する1年以上前に、ハマースがガザ地区とイスラエル領内を分け隔てるフェンスを複数の場所で破り、ガザ周辺のイスラエル人の居住地や軍の施設を攻撃しようとしているとの詳細な情報を得ていたとされる<sup>2</sup>。同様の情報は、イスラエル国内の治安を担う組織であるシンベトにも共有され、2022年末に発足した現在のネタニヤフ（Benjamin Netanyahu）政権にも一部が周知されていたという。しかし、イスラエルは適切な対応を怠った。なぜならば、イスラエルにとってハマースの脅威はガザ地区からイスラエルに向けて整備された地下トンネルへの対処に問題の焦点が移るとともに、相対的にガザ地区よりもヨルダン川西岸地区の政情不安への対応に関心が高まっていたからであった<sup>3</sup>。イスラエルは、ハマースが抑止されており、自身に対して戦争を仕掛けようとはしていないとの誤った確信を持っていたのである。ハマースに対するイスラエルのこのような認識の背景には、ハマースがイスラエルに偽りの安心感を与えていたということもあるのであろう<sup>4</sup>。

このように、イスラエルが誰を脅威として認識し、それにどのように対処しているのか、という点は、

<sup>1</sup> Michael Barnett, "Culture, Strategy and Foreign Policy Change: Israel's Road to Oslo," *European Journal of International Relations*, Vol. 5, No. 1, pp. 10-11.

<sup>2</sup> Amos Harel, "Over a Year Before October 7, Israel's Army Had Insight Into Hamas' Plan to Attack Israeli Towns, IDF Bases," *Haaretz*, November 24, 2023.

<sup>3</sup> Ibid.

<sup>4</sup> Beverley Milton-Edwards and Stephen Farrell, *Hamas: The Quest for Power*, Polity, 2024, p. 9.

10.7 事件の発生に結び付いているといえるのみならず、ガザ戦争を含め最大で「7 正面<sup>5</sup>」といわれた対イスラエル戦線への拡大を招き、今後の中東情勢にも影響を及ぼしうる。そこで、本稿は、イスラエルと域内の国家もしくは非国家主体との関係について、歴史的な変遷を交えながら整理し、今後の展望について検討してみたい。

## 1. 周辺戦略とは何か

イスラエルの脅威認識は、中東におけるその友敵関係から確認することができる。それは、誰を脅威としてみなし、その脅威への対処として誰と提携するのか、というイスラエルの対外政策に具体的に示されている。イスラエルでは、「周辺戦略（periphery strategy もしくは periphery doctrine）」<sup>6</sup> というものがそれに該当する。周辺戦略の策定者は、イスラエルの初代首相であるベン・グリオン（David Ben-Gurion）であった。彼が意図したのは、イスラエルを敵視する近隣のアラブ諸国に対し、イスラエルとの友好関係がそれらの国々の経済および技術発展に寄与することを示し、イスラエルと和平を締結することがその利点を得ることになると認識させることで、アラブ諸国を弱体化させることであった<sup>6</sup>。

イスラエルは、パレスチナ分割決議と呼ばれる国連総会決議 181 号に基づいて独立した。しかし、イスラエルを取り囲むアラブ諸国は、その決議 181 号に反対していた。イスラエルは、自国を敵視する国々に囲まれた環境の下で生存していかなければならなかった。イスラエルが最も脅威であると認識していたのは、エジプトを筆頭にソ連と協力関係にある急進的なアラブ民族主義諸国であった<sup>7</sup>。

これらの国々の脅威に対抗すべく、外交関係を有する友好国を増やしていくことがイスラエルにとっては生存戦略の一部となった。イスラエルが独立を

宣言した直後に勃発したアラブ諸国との戦争は、それを急務の課題とした。周辺戦略は、こうした状況のなかで策定されたのであった。

イスラエルが同盟相手として選んだのは、脅威であるアラブ諸国の周辺に位置するトルコ、イランおよびエチオピアであった。これには、以下のような背景が存在した。

まず、トルコについてである。トルコは、イスラエルを最初に承認したイスラーム国家であり、両国の外交関係は 1949 年に樹立された<sup>8</sup>。1952 年にトルコが北大西洋条約機構（NATO）に加盟すると、イスラエルとの間には以下のような対外政策上の共通点が見出されるようになり、両国の関係は強化された<sup>9</sup>。ひとつには、イスラエルもトルコ同様に自身を西側陣営の一員に組み込む選択をしたことである。それは、自国の経済発展のために、欧米諸国による財政支援を得るためであった。もうひとつには、両国ともにソ連を脅威視していたことであった。

次に、イランについてである。イランは、1951 年にイスラエルの存在を認めたが、法的な意味での承認は避けた。イランは、イスラエルを正式に承認し、国交を樹立することがアラブ諸国の逆鱗に触れ、自国の安全が脅かされることを恐れていた<sup>10</sup>。イスラエルとイランの間には、経済発展の度合いなどをめぐる競合意識が存在していたとされるが、最終的には次のような共通点が両国の協力関係を促進した。まず、両国の脅威認識についてである。イランにとってソ連は、歴史的に対立してきた国であり、そのイデオロギーが国内に浸透することは脅威であった。イランは、ソ連を後ろ盾とするエジプトの脅威にもさらされていた。そのため、イスラエルとイランは、ともに中東諸国に対するソ連の意図と、ソ連に友好的であるとともに汎アラブ主義を有する反欧米的なエジプトを共通の脅威としていた<sup>11</sup>。次に、イラン国内にはそれなりの規模のユダヤ人コミュニティが存

<sup>5</sup> Amy Mackinnon and Jack Detsch, “Israel’s ‘Seven-Front War’: Is Gaza just the opening battle in a war with Iran?,” *Foreign Policy*, September 12, 2024, <https://foreignpolicy.com/2024/09/12/israels-seven-front-war/>. なお、本稿で用いたインターネット資料の最終アクセス日は、全て 2025 年 5 月 7 日である。

<sup>6</sup> Trita Parsi, *Treacherous Alliance: The Secret Dealings of Israel, Iran, and the U.S.*, Yale University Press, 2007, p. 91.

<sup>7</sup> Yoel Guzansky, “Israel’s Periphery Doctrines: Then and Now,” *Middle East Policy*, Vol. 28, Issue 3-4, Fall-Winter 2021, p. 89.

<sup>8</sup> Efraim Inbar, “The Resilience of Israeli-Turkish Relations,” *Israel Affairs*, Vol. 11, No. 4, October 2004, p. 591.

<sup>9</sup> Parsi, *Treacherous Alliance*, pp. 20-21.

<sup>10</sup> Ibid., p. 23.

<sup>11</sup> Ibid., p. 22.

在しており、両国の接近が促されたことであった<sup>12</sup>。こうして両国の間には、イランからイスラエルへの秘密裏の原油供給を始めとする関係が構築されていった。

続いて、エチオピアについてである。エチオピアは歴史的に、エジプトとの間でナイル川の水利をめぐる対立を抱えてきた。エチオピアから流れ出る青ナイルは、ナイル川の水量の86%に当たるとされている<sup>13</sup>。しかし、エジプトは、1929年の英国との、また、1959年のスーダンとの合意に基づくナイル川の水資源に対する自身の利用権利を主張し、ナイル川の水利を目的とする巨大インフラの開発などを回避することに成功してきた。そのため、エチオピアは、ナイル川の水を有効に活用することができずにいた<sup>14</sup>。さらに、スーダンにおいて、アラブ民族主義の急先鋒であったナセル大統領の支持者が勢力を拡大したことも、エジプトに対するエチオピアの警戒心を強めた<sup>15</sup>。つまり、イスラエルとエチオピアの間には、やはりエジプトとの対立的関係という共通項が存在していた。こうして、両国は、相手との外交関係を深めることを戦略的に選択できたのであった。具体的には、1960年代にイスラエル軍がエチオピアの空挺部隊やテロ対策ユニットに対する訓練を提供するなど、軍事分野を中心に協力関係が強まっていった<sup>16</sup>。

## 2. 周辺戦略の揺らぎ

このように、イスラエルの伝統的な周辺戦略は、エジプトを筆頭とするアラブ諸国に対する脅威認識に基づき、非アラブ諸国と手を組むという構図を原型とするものであった。ここで確認しておきたいの

は、周辺という言葉に込められている意味である。

さきに、「脅威であるアラブ諸国の周辺に位置するトルコ、イランおよびエチオピア」（傍点筆者）と述べたが、ここでいう周辺は、地理的な概念ではない。「周辺」という場合、一般的には何らかの「中心」の存在が対になっている概念として考えられるであろう。イスラエルの周辺戦略においても、周辺は中心との関係で認識されており、こうした概念規定は不変的なものである。ただ、中心が意味するのはイスラエルにとっての脅威であり、ゆえに周辺はその脅威を共有する国家などを指していることから、イスラエルが誰を脅威として認識するかによって中心および周辺が示す対象は変わりうるといえる<sup>17</sup>。

周辺戦略は、1977年にベングリオンを始めとする左派の労働党政権が右派のリクード政権へと交代すると、より一層その重要性が認識されるようになった。なぜならば、ベギン（Menahem Begin）率いるリクード政権は、ベングリオンが想定していたアラブ諸国との和平を不可能だとみなすようになったからであった。ゆえにイスラエルは、非アラブ諸国との連携を維持することが国益に適うとの姿勢を強化したのであった<sup>18</sup>。

イスラエルは、上記3カ国に加え、イラクのクルド人やレバノンのマロン派キリスト教徒らとも提携していった<sup>19</sup>。前者との間を取り持ったのが自らも国内にクルド人を抱えるイランであった。一方、周辺戦略には以下のような揺らぎが生じることになった。まず、1974年9月、エチオピアでクーデターが発生し、帝政が打倒された。新たに誕生した軍主導の共産主義政権は、それまでの親西欧的な姿勢を転換し、ソ連を同盟国とするようになった<sup>20</sup>。また、イランでは革命が発生し、1979年2月に王制が打倒さ

<sup>12</sup> Ibid., p. 23.

<sup>13</sup> Nigusu Adem Yimer, “The Changing Aspects of the Ethio-Egypt Water Diplomacy-Key Drives, Challenges, and Prospects,” *Conflict Studies Quarterly*, Issue 41, October 2022, p. 80.

<sup>14</sup> John Mukum Mbaku, “The controversy over the Grand Ethiopian Renaissance Dam,” Brookings, August 5, 2020, <https://www.brookings.edu/articles/the-controversy-over-the-grand-ethiopian-renaissance-dam/>.

<sup>15</sup> Yaniv Voller, “From Periphery to the Moderates: Israeli Identity and Foreign Policy in the Middle East,” *Political Science Quarterly*, Vol. 130, No. 3, 2015, p. 514.

<sup>16</sup> Yabsira Yesiwas, “Reflections on Israel-Ethiopia Relations: A Historic and Strategic Bond,” *Horn Review*, March 23, 2025, <https://hornreview.org/2025/03/23/reflections-on-israel-ethiopia-relations-a-historic-and-strategic-bond/>.

<sup>17</sup> Voller, “From Periphery to the Moderates,” p. 509.

<sup>18</sup> Parsi, *Treacherous Alliance*, p. 70.

<sup>19</sup> Guzansky, “Israel’s Periphery Doctrines,” p. 91.

<sup>20</sup> Yesiwas, “Reflections on Israel-Ethiopia Relations.”